

# 特別支援教育だより

三重県立特別支援学校伊賀つばさ学園 教育支援部 発行  
平成30年度 第4号（3月15日）

早いもので1年が終わろうとしています。年度始めに立てた目標や手立てについて評価をされていることと思います。子どもの変容に喜んだり、支援の難しさを感じたり、様々な思いを持たれているかもしれません。そして4月にはまた新たに子どもたちと出会い、支援の具体策を探られることでしょう。そのためには子どもの実態把握が重要なことは言うまでもありません。新年度を迎えるにあたり、アセスメントの目的や気づきの視点について、改めていくつか紹介したいと思います。

## 子どもがより良く生きるために

「子どもの発達、他との比較を超え、その子どもとして、今、ここでよく生きているか、という視点でとらえるべきであり、心理アセスメントは、それを客観的に明らかにするものである」

「その子どもがよく生きることが阻害されているならば、何をどうすることでその阻害を取り除き、子どもがよく生きることが実現するかを見通すことが重要である」

これらは教育心理学者の伊藤隆二先生の本に書かれた文章です。私たちは、子どもを見るときに同じ学年学級の子どもたちと比べてしまいがちです。（遅れている、ゆっくり、等）また、検査の結果（診断）に理由を求めてしまうこともあります。しかしながら、アセスメントを通してその子どもがよりよく生きるにはどのような支援が必要か探ろうとしていることを忘れてはいけません。何を困っているのか、困っている状態が何によってもたらされているのかを把握するのです。そして、原因の除去や代替方法を考えたり、環境調整を行ったりします。

## 「できない」ことには理由がある

例えばこんな場面がありました。ある日の授業が始まってから、ある児童が机に突っ伏したまま、促しても授業に参加できないことがありました。行動だけ見ると問題があると捉えてしまいましたが、後日、取り組みの中にある構音練習で「ラ行」がうまく言えないことが原因であると分かったのです。背景にある子どもの課題を把握していくこともアセスメントの役割の一つです。漢字が覚えられない子どもに対して、何十回も書かせる指導をいませんか。できないことを繰り返し練習させれば、できないことは鍛えれば、必ずできるように

なる子どもばかりではありません。なぜ覚えられないのか、他に有効な方法はないかを探ることが私たちの役割なのです。

### できないことばかりではなく、できることに着目する

子どもの苦手なことや困っていることに気づくことから支援は始まりますが、得意なことや、苦手なことをカバーするために活用できる力を把握することもアセスメントの目的の一つです。例えば、九九の暗唱において、何度も唱えて覚える練習方法がよくみられます。しかしながら、聴覚的ワーキングメモリーに課題があるものの、認知処理様式が視覚優位である場合、九九表やカード等の教具を活用した方が有効な場合があります。子どもの苦手な部分と活用できる強みの両方を把握することで、強みを活用した支援内容や方法、教材等を工夫することができるのです。

アセスメントのために闇雲に検査をすればいいわけではありません。検査の結果を支援のために有効に活用するためには、それぞれの検査が何を測定し、何を目的にしているのかを知っていなければなりません。検査の目的を知っていれば、目の前で困っている子どものアセスメントを行うためにどの検査を実施すればよいか分かります。校内で実施できない場合は教育センターや発達支援センターに相談することができます。

そして、アセスメントの結果を具体的な支援内容や方法に生かしてほしいと思います。及ばずながら、本校教育支援部もよりよい支援に向けて一緒に考えていきたいと思います。次年度もどうぞよろしく願いいたします。

参考：「気づき」から始まるアセスメント，LD/ADHD&ASD 2018.7

(文責 清都)

### 平成31年度の子定

学校見学会 6/20(木)

福祉事業所向け学校見学会 7/3(水)

小学部公開体験授業 6/12(水)、9/19(木)、10/18(金)

中学部公開体験授業 7/11(木)、10/10(木)、11/28(木)

※変更になる場合があります。新年度になりましたらホームページ等でご確認ください。